

古くて新しい問題、目録の作成 —日本昆虫目録の作成に従事して—

上田 恭一郎 (北九州市立自然史・歴史博物館)

演者は現在日本昆虫学会の日本昆虫目録編集委員会に属し、編纂中の「日本昆虫目録」の鱗翅目篇を担当している。この委員会は1999年に企画委員会が発足したのを受けて2001年に始まり既に10年が経過した。現在最初の出版が「鱗翅目チョウ篇」と無翅昆虫を中心としたいわゆる「small orders」で行われようとしている。本目録の編纂過程で直面した多くの問題があるが、主に下記の5つの観点から詳述したい。

1) 日本国内に原記載文献が欠如：これまでの目録は原記載が記述されていても、編纂者が原記載を直接閲覧せず、海外の論文、カタログからの引用ですますことがしばしばであった。今回の目録はシノニムまで含めてその「タイプロカリティを原記載どおり引用すること」という規定が加えられたので、あらためて原記載を参照する必要があるが生じた。リンネの「自然の体系」第10版(1758)以降出版された昆虫関連の文献は



図1 「日本産蝶類和名学名便覧」ホームページトップ

膨大なものにはるが、18世紀の単行本、第二次大戦中および直後の欧米の雑誌は、国内で収集している公共機関が少ない。この欠落は21世紀になっても依然として埋まっていない。近年ネット上でこれらの文献が閲覧可能になってきたが、結局ロンドンの自然史博物館で閲覧しないと、有名な害虫でも実は不明のものが多く、改めてその欠落状態を実感した。

- 2) 熟練分類学者の逝去：近年昆虫分類学者の逝去が相次ぎ、カタログデータの整理、検討、訂正が困難な分類群が続出している。カタログデータの電子化が進んでいなかったこともあるが、その群に関する知識の次世代への伝達が極めて個人的なレベルでしか行われず現状も明瞭になった。
- 3) 分類体系の急激な変化：種レベルでのデータが完備したとしても、それらをどの高次分類体系のもとに編纂するかが問題となる。これは近年分子系統解析が盛んになり、亜科、科レベルで多くの体系が提出されているからであり、体系の不安定さという問題が改めて出現した。
- 4) 出版形態：アナログ、電子媒体どちらも長所と短所があり、加えてマーケットリサーチのもと学会への金銭的貢献の可能性、損益分岐の問題も把握して出版形態を決める必要が出て来た。
- 5) 情報公開：目録等データベースの公開は社会の流れであるが、他方そのデータベースを作る作業、努力は2)でも明らかなように依然として個人の分類学者にかかっているのが現状である。インパクトファクター

に象徴されるように昨今の業績主義の中ではデータベース作成がほとんど業績として認められない。演者は猪又、植村、矢後、上田、神保による「日本産蝶類和名学名便覧」(<http://binran.lepimages.jp/?locale=ja>)を立ち上げ、問題の解決を試みたので報告する。



図2 ロンドン自然史博物館昆虫部門図書室



図3 リンネとファブリチウスの著作